

握する。設定した作業時間や範囲を超えると異常が社員やユーザーに通知され盗難抑止につながる。

不具合を早期発見し、自社で部品調達、補修するので、機械が停止し一刻を争う農作業に支障が出る最悪の事態を避けられる。また「農業者に誇りや喜びを」と、デザイン性にも力を入れている。フェラーリのデザインで知られるデザイナー奥山清行氏がデザインしたモデルを投入。昨年大阪・御堂筋でフェラーリ100台とパレードしたが、今後も農業に関わりのない人にも親しみを持ってもらい、新しい農業のイメージを発信する試みを続けたい。

十勝に新店舗を

ー日本を代表する農業地帯・十勝の所見と北海道向けの戦略を。

毎回国際農機展に合わせて訪れているが、大規模で先進的な農業に驚かされる。農機や関連設備業者が集積し、日本農業の手本といえる存在。最先端技術への関心も高い地域で、リモートサポートセンターでは道内の稼働1割強に当たる約150台を支援している。インバウンド（外国人観光客）急増を生かして、食と農を世界に発信してほしい。

会社としても今後も北海道への注力続ける。アグリソリューションセンター北海道（江別市）は、昨年1万1800人が来場し、見学者約4700人の3割に当たる約1400人が十勝からだ。農業者の来場が多い冬場にも走行実演できるように、70メートル×13メートル×高さ7

メートルのハウスを建設した。ぜひ最新鋭の機械を体感してほしい。また、特に十勝は新たに店舗・工場を出し、営業・技術スタッフを増強するなど力を注ぎたい。

ー今後の農業をどう展望するか。

高齢化、後継者不足の課題はICTと技術力でサポートし、農業者の声に耳を傾けアフターサービスにも力を入れたい。一方、消費者の食に対する安全安心、高水準・高品質のニーズはさらに増すだろう。日本農業が国際市場へと打って出る可能性を、サポートしたい。



<profile>

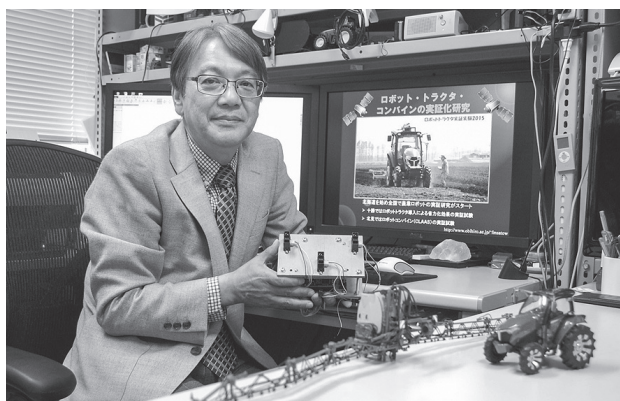
ますだ・ながもり 1958年福岡県出身。長崎大学卒。ヤンマー農機販売九州カンパニー社長、ヤンマー農機事業本部国内営業部長などを経て、2015年からヤンマーアグリジャパン社長兼ヤンマーアグリ事業本部国内営業本部執行役員部長。

<企業データ>

ヤンマーアグリジャパン ヤンマーの農業部門のグループ会社として2014年に設立。農業機械の販売やメンテナンス、農業経営に対するソリューション提案などを行う。資本金9000万円。社員数4108人（16年3月末時点）。

農業ガイド1057号 コレ、究めてます 帯畜大教員紹介3 佐藤禎稔教授 無人運転トラクターを研究

2016年5月14日



<プロフィール>

1956年秋田県能代市出身。帯広畜産大学農業工学科卒。農機メーカーを経て同大助手、2012年から現職。専門は農業機械学、農業ICT。農業食料工学会、日本ロボット学会などに所属する。

人手不足 ロボットが解消

1戸当たりの耕地面積が広がる一方、労働力不足に悩む十勝農業。畑作農家にトラクターは複数台あっても、

運転手が足りない状況もある。「無人運転のトラクターなら1人削減できる。まだ安全上の課題はあるが、将来はロボットトラクターの方向に向かう」と話す。

畜産学部だけの単科大学にあって、その研究内容は工学部に近い。机の上にあるのはスプレイヤー（農業散布機）に付ける光センサー。アームが地面とぶつかって壊れるのを防ぐための装置で、「試験管を振るよりも機械を開発したり作ったりするのが楽しい」と笑う。

農水省の補助を受けたロボットトラクターの実証実験では研究代表者を務める。農業試験場や農機メーカーと共同研究する中で、作業精度向上のためのデータ収集、畑で稼働させるためのシミュレーションなどを担当する。

「最近はどんなことをしているのか聞かれることが多い」と話し、その研究に関係者も注目する。将来取り組みたいテーマの一つが、トラクターの夜間無人運転。「明日朝までにしたい作業を、トラクターがしてくれるのが究極の目的。農家は喜んでくれると思う」。馬耕からトラクター、ICT（情報通信技術）化と変わる農業現場で、機械が果たせる役割を探究している。